平成２８年度病害虫発生予報第２号

平成２８年４月２０日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区　分	農作物名	病　害　虫　名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ　ネ	苗立枯病	－	平年並
		ばか苗病	－	平年並
		イネミズゾウムシ	やや早い	平年並
果　樹	ナ　シ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	やや多い
		赤星病	やや早い	平年並
		カメムシ類	やや早い	やや多い
	カ　キ	灰色かび病	やや早い	平年並
		樹幹害虫（ﾋﾒｺｽｶｼﾊﾞ、ﾌﾀﾓﾝﾏﾀﾞﾗﾒｲｶﾞ）	やや早い	やや多い
	ブドウ	灰色かび病	平年並	平年並
		べと病	平年並	平年並
野　菜	ネ　ギ	べと病	－	多い
		さび病	早　い	やや多い
		ﾈｷﾞﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ、ﾈｷﾞｱｻﾞﾐｳﾏ	平年並	平年並
	スイカ	菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	やや多い
	スイカ、メロン	アブラムシ類	平年並	やや多い
		ハダニ類	平年並	やや多い

気象予報（抜粋）

１か月予報（４月１６日～５月１５日：４月１６日、広島地方気象台発表）

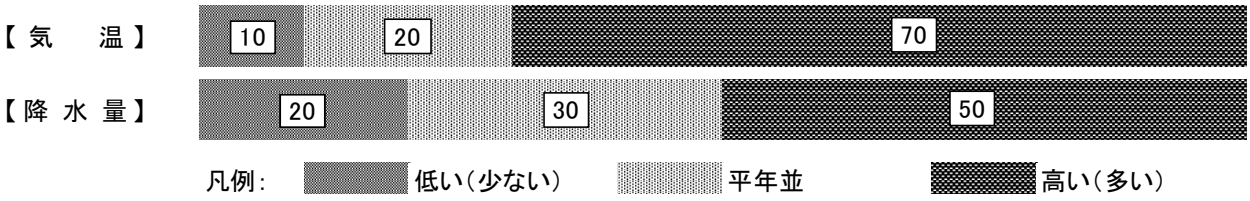
向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

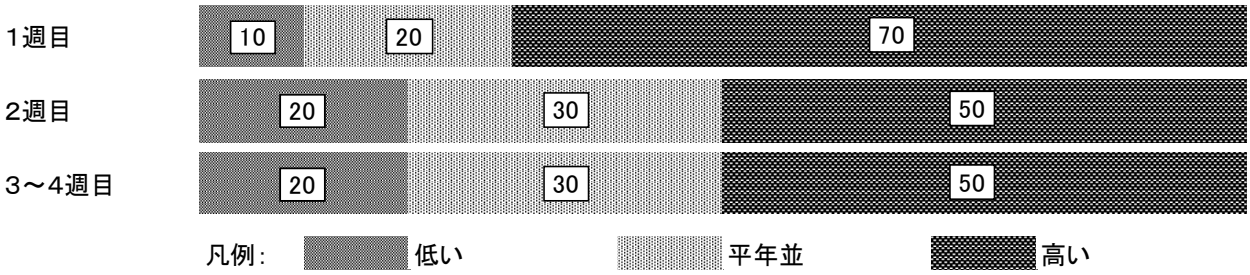
向こう１か月の平均気温は、高い確率が７０％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率７０％です。２週目は、高い確率５０％です。

＜向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率（%）＞



＜気温経過の各階級の確率（%）＞



普通作物

［イ　ネ］

1　苗立枯病
（１）予報の内容
　　発生地域　　県内全域
　　発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠
　ア　苗立枯病の予防防除が広く普及している。
　イ　向こう１か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。
（３）防除上注意すべき事項
　ア　発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。
　イ　育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。
　ウ　リゾープス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種１４日後まで)までであれば、発見後直ちにダコニール１０００（使用回数は２回以内）の５００～１，０００倍液などをかん注することにより、蔓延を防止できる。
　エ　ムレ苗が発生した場合には、タチガレエースM液剤（育苗箱へのかん注は１回以内）の５００～１，０００倍液又はタチガレン液剤（育苗箱へのかん注は２回以内、ただしタチガレエースM液剤等のヒドロキシイソキサゾールを含む剤を使用した場合は１回以内）の５００～１，０００倍液を、１箱当たり０．５リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2　ばか苗病
（１）予報の内容
　　発生地域　　県内全域
　　発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠
　　前年の本病の発生は平年並であったため、本年用種子の保菌率は平年並と推測される。
（３）防除上注意すべき事項
　ア　温湯種子消毒に当たっては、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種時には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。
　イ　薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）に当たっては、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は１０℃以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として行わないが、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。なお、薬剤については、病害虫防除指針などを参考にする。

3　イネミズゾウムシ
（１）予報の内容
　　発生地域　　県内全域
　　発生時期　　やや早い
　　発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠

ア　４月１４日現在、予察灯（鳥取市橋本）への飛来は確認されていない。
イ　４月１４日現在、本種の飛翔に必要な有効温度の積算値は平年より高い。さらに、向こう１か月の気象予報から、発生時期はやや早いと見込まれる。
ウ　前年の第１世代成虫の予察灯への誘殺数は平年並であった。
（３）防除上注意すべき事項
育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、１箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に１箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。なお、薬剤については、病害虫防除指針などを参考にする。

果　樹

［ナ　シ］

１　黒斑病
（１）予報の内容
発生時期　　やや早い
発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠
ア　県予察ほ場における４月第２半旬までの胞子飛散数は、ほぼ平年並であった。
イ　本病の越冬伝染源はやや少なかった。
ウ　ナシの生育は平年と比較してやや早い。
エ　向こう１か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は５～７日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。
イ　薬剤はベルクートフロアブル１，５００倍液、ユニックス顆粒水和剤４７の１，５００倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）１，０００倍とポリオキシンＡＬ水和剤１，５００倍の混用液などを使用する。
ウ　スピードスプレーヤにより防除を実施する地域では、往復走行又は縦横走行による散布を行い、散布むらが無いように注意する。
エ　雌しべ感染を防ぐため、摘果するときにはできる限り雌しべを取り除く。

２　黒星病
（１）予報の内容
発生時期　　やや早い
発 生 量　　やや多い
（２）予報の根拠
ア　県予察ほ場における果そう基部病斑からの分生子飛散数は平年並に推移している。
イ　ナシ園における越冬病芽調査の結果によると、腋花芽の病芽率は平年に比べやや高かった。
ウ　ナシの生育は平年と比較してやや早い。
エ　これまでの気象経過、向こう１か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　伝染源となる果そう基部病斑は見つけ次第切除し、ほ場外で処分する。

イ　薬剤は、落花期にＥＢＩ剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）４，０００倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）５００倍の混用液などを、摘果期にはベルクートフロアブル１，５００倍液、ユニックス顆粒水和剤４７の２，０００倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤４，０００倍液などを散布する。

３　赤星病

（１）予報の内容

発生時期　　やや早い

発 生 量　　平 年 並

（２）予報の根拠

ア　県予察ほ場（北栄町由良宿）のビャクシン上における冬胞子堆形成量はほぼ平年並であった。

イ　ナシの生育は平年と比較してやや早い。

ウ　向こう１か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア　薬剤は、落花期にＥＢＩ剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）４，０００倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）５００倍の混用液などを散布する。

イ　例年発病の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、５月上旬にＥＢＩ剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）４，０００倍液などを追加散布する。

４　カメムシ類

（１）予報の内容

発生時期　　やや早い

発 生 量　　やや多い

（２）予報の根拠

ア　県予察ほ場（北栄町）における集合フェロモントラップ（乾式型）において、４月第２半旬（平年：４月第５半旬）にチャバネアオカメムシの初誘殺を確認した。

イ　クサギカメムシの越冬成虫数（ベニヤ板トラップ、県下９地点調査）は、トラップあたり１．６頭（前年：０．４頭）で前年より多く、春期の発生量はやや多いと見込まれる。

ウ　ナシの生育は平年と比較してやや早い。

エ　向こう１か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年よりやや早い４月下旬頃と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア　山間地や民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ　摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）２，０００倍液などを散布する。

［カ　キ］

１　灰色かび病

（１）予報の内容

発生時期　　やや早い

発 生 量　　平 年 並

（２）予報の根拠

ア　４月中旬現在、本病の発生は確認されていない。

イ　カキの生育はやや早い。
ウ　向こう１か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　病原菌は低温、多湿条件を好むため、天候不順が続くと本病が発生しやすい。また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。
イ　西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。
ウ　４月１２日の降霜により、霜害を受けたほ場では、本病の発生に注意し、防除対策を徹底する。
エ　防除薬剤は、フルピカフロアブル３，０００倍液、ゲッター水和剤１，５００倍液又はオンリーワンフロアブル２，０００倍液などを散布する。

２　樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）
（１）予報の内容
発生時期　　やや早い
発 生 量　　やや多い
（２）予報の根拠
ア　昨年の樹幹害虫の被害はやや多く、越冬密度はやや高いと見込まれる。
イ　向こう１か月の気象予報から、越冬世代成虫の発生は、平年よりやや早い４月中下頃から始まると予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　防除は幼虫の食入防止を目的に、第１世代幼虫の発生時期である４～５月を目安に１回目の薬剤処理を行う。
イ　薬剤はフェニックスフロアブル２００倍液またはガットサイドＳの１．５倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に散布する。

［ブドウ］

１　灰色かび病
（１）予報の内容
発生時期　　平 年 並
発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠
ア　４月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。
イ　向こう１か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　病原菌は低温、多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。
イ　薬剤はパスワード顆粒水和剤１，５００倍液、スイッチ顆粒水和剤３，０００倍、ゲッター水和剤１，５００倍液、ポリベリン水和剤１，０００倍液、ロブラール水和剤１，５００倍液及びロブラールくん煙剤１００ｇ／くん煙室容積３００～４００m^3（高さ２ｍ、床面積１５０～２００m^2）などを使用する。
ウ　施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げる。

２　べと病
（１）予報の内容
発生時期　　平 年 並
発 生 量　　平 年 並
（２）予報の根拠
ア　４月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。
イ　前年の発生量はやや少なかったことから、越冬伝染源密度はやや低いと考え

られる。
ウ　向こう１か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　開花期以降の天候不順は、本病の発生を助長するので注意する。
イ　薬剤は、落花後（小豆大）にアミスター１０フロアブル１，０００倍液、ストロビードライフロアブル２，０００倍液又はベトファイター顆粒水和剤３，０００倍液などを使用する。
ウ　青ブドウ等の発病しやすい品種、または本病が例年多い園では、展葉６～８葉期にアリエッティＣ水和剤８００倍液を追加散布する。
エ　発病果及び病葉は見つけ次第、園外に持ち出して処分する。

野　菜

［ネ　ギ］

１　べと病（平成２８年３月２３日付けで平成２７年度病害虫発生予察注意報第２号を発表）
（１）予報の内容
発 生 量　　多　　い
（２）予報の根拠
ア　３月第６半旬以降、中～西部現地ほ場で春ネギを中心に発病が急増し、４月中旬現在においても発生量は引き続き多い。
イ　本病は、１５～２０℃程度で降雨が続く好適発生条件になると、発病が急速に広がる傾向があるため、予防防除を徹底する。気象予報から、引き続き発病の増加が見込まれる。
ウ　気象予報から、発生量は多いと予想される。
（３）防除上注意すべき事項
平成２７年度病害虫発生予察注意報第２号を参照。

２　さび病
（１）予報の内容
発生時期　　早　　い
発 生 量　　やや多い
（２）予報の根拠
ア　３月中旬の調査において、例年比で本病の発生ほ場率は高かった。
イ　４月中旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
ウ　向こう１か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。
（３）防除上注意すべき事項
ア　被害葉等は伝染源となるのでほ場の近くに放置しない。
イ　発病後の散布は効果が劣るため、予防散布に重点をおく。発病前や発病初期には７～１０日間隔でマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤６００倍液、ペンコゼブフロアブル５００～６００倍液など）、ラリー乳剤４，０００倍液、ラリー水和剤２,０００倍液、カリグリーン８００倍液などを散布する。
ウ　すでに多発しているほ場においては、アミスター２０フロアブル２,０００倍液、ストロビーフロアブル２，０００倍液、ベルクート水和剤２,０００倍液、オンリーワンフロアブル１，０００倍液あるいは、オンリーワンフロアブル１，０００倍液にカリグリーンを８００倍で混用して散布する。

３　ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ
（１）予報の内容

発生時期　　平 年 並
発 生 量　　平 年 並

（２）予報の根拠

ア　４月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマともに発生量は平年並である。

イ　向こう１か月の気象予報から、両種とも発生量は平年並と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア　苗の定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）６kg／１０ａの株元散布又はアクタラ粒剤５の６～９kg／１０ａの作条混和処理などを行う。また、定植前日～定植時のジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）５０倍液又はキックオフ顆粒水和剤１００倍液の育苗トレイ灌注なども効果的である。

イ　本圃生育中のネギに対しては、アニキ乳剤１，０００倍液、アグロスリン乳剤２，０００倍液、ディアナＳＣ２，５００～５，０００倍液などを散布する。

［スイカ］

１　菌核病

（１）予報の内容

発生時期　　平 年 並
発 生 量　　平 年 並

（２）予報の根拠

ア　４月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ　本病は、１５～２０℃程度の気温で多湿条件が続くと発病が増加する。向こう１か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア　ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。マルチ上にたまった水は適宜、穴を開けて排水する。また、咲き終わった花弁は発病しやすいので、摘み取って除去する。

イ　薬剤は、ベルクート水和剤１，０００倍液、カンタスドライフロアブル１，５００倍液、セイビアーフロアブル２０の１，０００倍液、ロブラール水和剤１，０００倍液などを散布する。

ウ　曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒６ｇ／１００m^3（床面積５０㎡×高さ２ｍ）、ロブラールくん煙剤１００ｇ／３００～４００m^3（高さ２ｍ、床面積１５０～２００㎡）などを使用する。

２　つる枯病

（１）予報の内容

発生時期　　平 年 並
発 生 量　　やや多い

（２）予報の根拠

ア　４月中旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ　本病は降雨や過湿で発病が増加する。向こう１か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア　ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ　本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤６００倍液、アントラコール顆粒水和剤６００倍液、ダコニール１０００の１，０００倍液などを散布する。

［スイカ・メロン］

1　アブラムシ類
（１）予報の内容
　　発生時期　　平 年 並
　　発 生 量　　やや多い
（２）予報の根拠
　ア　４月中旬現在、現地調査ほ場においてアブラムシ類の発生はみられていない。
　イ　向こう１か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。
（３）防除上注意すべき事項
　ア　ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
　イ　初発生に注意し、初期防除を徹底する。
　ウ　スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス顆粒水和剤５，０００倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。
　エ　スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤５，０００倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤２，０００～４，０００倍液などを散布する。
　オ　メロンでは、チェス顆粒水和剤５，０００倍液、モスピラン顆粒水溶剤８，０００倍液などを散布する。

2　ハダニ類
（１）予報の内容
　　発生時期　　平 年 並
　　発 生 量　　やや多い
（２）予報の根拠
　ア　４月中旬現在、現地調査ほ場においてハダニ類の発生はみられていない。
　イ　向こう１か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。
（３）防除上注意すべき事項
　　ハウスなどですでに発生がみられる場合、スイカ、メロンともにバロックフロアブル２，０００倍液、ダニサラバフロアブル１，０００倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤１,０００倍液、マイトコーネフロアブル１，０００倍液などを散布する。

［おしらせ］

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。（http://www.famic.go.jp/）
なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

＜鳥取県病害虫防除所ホームページ＞

アドレス　http://www.jppn.ne.jp/tottori/

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

＜お問い合わせ＞

普通作物関係：〒680-1142　鳥取市橋本 260
鳥取県病害虫防除所
（TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp）
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
（TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723）

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221　東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
（TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822）

※ 予報第３号の発表は、５月１１日（水）の予定です。